

唐十郎論 逆襲する言葉と肉体

樋口 良澄 著

(未知谷・2100円)



ひぐち・よしずみ
1955年生まれ。編集者。共著に『木浦通信』『東京情報コレクション』など。

2012年2月5日

日曜日

『東京新聞』書評

この一二月、唐十郎の『下谷万年町物語』がシアターコクーン（東京・渋谷）で上演された。蛭川幸雄演出、傑作の三十二年ぶりの再演だ。宮沢りえや藤原竜也と共に、唐も初演と同じ役で舞台上に立ち、変わらぬ存在感を示した。

この『唐十郎論』はそんな唐の創作の秘密に迫ろうとする一冊だ。問題は多岐にわたるが、通底するのは、唐は芝居で「私とは何か」を追求しているという視点だろう。唐一流の台本の書き方（「当て書き」）を分析し、唐の演劇理論「特

権的肉体論」を基に言葉と肉体の関係を探っていく。手法は初めこそアカデミックな印象だが、次第に面白くなる。

なかでも独特なのは、疎開先から戻った幼い唐が見た東京の焼け野原―唐の原点には敗戦による「世界の大転換」があるという視点。唐作品の「虚構と現実」を焼け跡に求めるのは新鮮だ。

本書のもう一つの特徴は、八〇年代以降の状況のなかで唐の演劇を考えている点。高度消費社会への唐の挑戦を、著者は情報誌『ぴあ』の情報管理システムへの反発に見

濃密な集団で継がれる感性

て取る。八〇年代を語って『ぴあ』に着目するのは、編集者でもある著者の面目躍如といえよう。

唐作品を観始めたのが七〇年代初めという著者が、かつての「状況劇場」より現在の「劇団唐組」に近いのは当然だろう。交流を重ねるなかで、唐組の「濃密な人間関係」に、現代のプロデュース公演が失ったものを見いだす。公演の時だけ集まる方式では濃密な関係は難しい。唐組の濃密な集団の力は、「劇団唐ゼミ☆」ほか唐門下生の感性に受け継がれているという。

プロデュース公演が全盛となって久しく、既成の劇団は苦戦を強いられいている。だが、同じ集団でも「イキウメ」「五反田団」など、若手の軽やかなユニットが元気なのも事実なのだ。そんな公演主体のあり様についても、本書は考えさせる。

評者 石関 善治郎

(ライター)